

西洋教育史の研究動向

著者	安川 哲夫
著者別表示	Yasukawa Tetsuo
雑誌名	日本の教育史学
巻	32
ページ	265-269
発行年	1989
URL	http://doi.org/10.24517/00052998

doi: 10.15062/kyouikushigaku.32.0_265



西洋教育史の研究動向

金沢大学 安 川 哲 夫

教育史研究はいま大きな曲がり角に来ている。国別、時代別、分野別に研究が専門分化されて多くの知識を持てるようになった反面、研究者たちの共通認識は薄らぎ、かつてのような教育史固有の課題は見つけにくくなっている。近年の学会シンポジウムはこうした混迷から抜け出すための懸命の試みのようにも見える。いま教育史に求められているものは何か。何が歴史研究において問題なのか。純粹に知的な誠実さだけで果たして教育史研究は成り立つのか。そういう思いでこの一年（1月～12月）を注目していた。

少々オーバーな言い方かもしれないが、以後の教育史研究を占う意味で注目すべき二つの出来事があった。一つは、『世界新教育運動選書』（長尾十三二監修、明治図書）の総まとめとも言えるべき別巻三冊が公刊されたこと。そしてもう一つは、「教育の社会史とは」というテーマで教育史研究の方法論をめぐる問題が学会シンポジウムで取り上げられたこと。幸い、昨年度担当の斉藤新治が全般的な動向を詳細にチェックしてくれているので、今年は思い切って新教育と社会史関係に重点をおいてフォローしたいと思う。

（1）

『選書』別巻は、新教育運動の遺産の「問い直し」作業であった本巻の成果を踏まえ、「教育学説史への展望を開く」という課題の下に行われた、わが国最初の新教育の「総合的」研究である。それは各国の新教育理論や運動の基本的側面を扱った①『新教育運動の生起と展開』、それを支えた学問的・人間観的基礎を論じた②『新教育運動の理論』、学説史的な展望を試みた③『新教育運動の歴史的考察』の三巻から成っている（詳細は『教育学研究』55巻4号を参照）。これまで個別的分散的にしか論じられることのなかった新教育運動を多角的多面的に論究したその成果は高く評価することができる。研究者48名（延べ総数）の手よりなる別巻の教育史研究への貢献はまず第一にここにある。

だが全体を読み通してみると、いくつか疑問が浮かび上がってくる。例えば、新教育は何であったのかという問題ひとつをとってみても、良い新教育と悪い新教育があったりするし、また新教育を旧教育の全面的な批判・克服と見るのか改良・改革と見るのか、また遺産の継承・発展なのか批判・反省なのかについても論者の立場はまちまちである。問題は大きく見れば二つあるように思われる。第一は、新教育に対立するものとして位

IV 研究動向

置づけられている旧教育の捉え方が一面的であること。この一面性は、新教育の担い手たちが自らの理論と実践の正当性と有効性を明示するために描き出した図式に論者が安易に飛び乗ったのではないかと錯覚するほどである。現実の公教育との関係や新教育が失敗せざるを得なかった矛盾など、まだ十分には解明されていない。第二の問題は、教育学説史的観点から新教育を位置づける際の共通の概念枠組の欠如である。ここには運動の段階区分の問題も入ってこよう。新教育の多様な性格からして、この作業がいかに困難であるかは容易に察しがつく。が、方法論も課題意識もばらばらでは「学説史への展望を開く」という課題は結局は論者個々人の手に委ねられ、ひいては読み手に任されてしまうのではなからうか。

以上はあくまでも全体的な概括であって、個別的に見ると秀作が少なくない。中でも、19世紀的な進歩史観の崩壊の道筋に新教育の発達観を位置付けた原聡介の論文は、近代教育と新教育の連続・非連続の問題を考える上で示唆に富む。またニールの感情の教育を論じた宮寺晃夫の論文は、子どもの解放を目指した新教育が逆にその自然に合致した技術と制度でもって子どもを囲い込み、体制内化していくパラドックスを明らかにしてくれる。イギリスおよびアメリカの新教育運動の学問的基礎を生命学および社会学に求めて考究した三笠乙彦、森田尚人の論文は、新教育の本質を理解する上からも有意義。1900年前後の世界を横断的に素描した長尾論文は、共通の関心に貫かれた新教育運動の国際的な広がりを証明してくれる。アメリカ新教育運動の評価やデューイ解釈において森田に論戦を挑む毛利陽太郎の論文も刺激的。

『選書』はこれ以外にマカレンコ『科学的訓育論の基礎』、ウォッシュバーン『教育の個別化』、キルパトリック他『アメリカの幼稚園運動』を刊行。完結も間近である。一つの仕事の完成は次の新たな研究の始まり。リーツのアボツホルムの新学校を生活改良運動との関連でおさえた財満寿子の論文（別巻①所収）、学会での菅野文彦「G. S. ホールの思想課題」、友成昇「イギリスの進歩主義教育における精神分析的教育革新のあり方」の発表、それに橋本伸也「ロシアの新教育における自由の問題」（『京都大学紀要』34）など、若手研究者の間に新たな息吹きを感じる。今後の成果が期待される。

(2)

社会史的研究としては、宮澤康人編『社会史の中の子ども—アリエス以後の〈家族と学校の近代〉』（新曜社）、中内敏夫『教育学第一步』（岩波書店）に注目したい。共に伝統的な「教育」概念と教育史研究における方法論の革新を目指した作品。

前者は「家族と学校の社会史研究会」の研究成果の一部で、宮澤ほか森田伸子、森田尚人、鳥光美緒子、北村三子らの力作が収録されている。いずれも各国の家族・子ども

史研究の成果をフォローし、その批判的検討を通して教育史研究においていま何が問題であるのかを問うている。『教育学研究』55巻4号に書評が掲載されているので、ここでは学会シンポジウムの提案者の一人でもあった宮澤に限定して動向を探ってみたいと思う。

宮澤は、総論部分にあたる第一章「アリエスの近代と子ども・家族・学校」において、まずアリエスによって指摘された近代の子ども期への二つのサンチマン（幼少年期への家庭的な可愛がりのサンチマンと青少年期への学校的＝モラリスト的サンチマン）を手掛かりに彼の書の徹底した読み返しを行い、次に先行研究にあたりながら近代における家族－学校の連関変化の視点を吟味し、最後に家族、学校、地域社会、階級、国家における大人と子どもの関係を全体構造として歴史的に描き出すことがこれからの教育史研究の主要な課題であると主張する。ここには従来の教育主体中心の意図史と子ども史研究に見られる学習主体中心の歴史とを相互に架橋し、関係の諸相から教育の本質に迫ろうとする新たな視点の提示がある。ところで宮澤は、この立場を〈教育関係〉論あるいは〈関係〉史と呼び、その枠組の構築を数年前より大学のゼミその他で模索しているが、それが教育史研究の方法として今後根づいていくためには、青写真の輪郭が個別研究を踏まえつつより一層明確にされることが望まれよう。

なお、ゼミの成果の一部は小林亜子「〈教育関係〉と近代－教育史の新しいアプローチを求めて－」（東京大学教育哲学・教育史研究室『研究紀要』14）に要領よくまとめられており、また同会員の、フランス革命期における「青年期」概念の成立の画期性を論じた「伝統的〈若者期〉の変容と近代的〈青年期〉の形成」（『教育学研究』55巻4号）はその具体的な研究成果となっている。ルゴフの『煉獄の誕生』とダンテの『神曲』を参考に、若者の自己浄化への意志をてこに近代教育論の読み直しを試みた寺崎弘昭「煉獄と近代教育」（お茶の水女子大学『人間発達研究』13）も同じ文脈に位置する論文。

中内の書は、「教育学のパラダイムの転換」を意図した第一部「教育原論」と、発達の助成的介入としての教育の概念の成立と発展を扱った第二部「教育学説史」とから成っている。ここで重要なのは、著者の提唱してきた「新しい教育史」の内実が被瀝された後者。ラトケ以下の教授学者に「汎愛派」の用語を当てることに疑問なくはないが、事実さしあたって問題ではない。なぜなら、それはひとつの教育の社会史の試みであり、今日「教育」「教育学」と呼んでいる概念を生み出す母体となった近代固有の教育心性が、中世共同体の解体から公と私、知と徳の二元的世界の確立と直系単婚家族の自立に伴うその誕生・外化の過程で、何を新たに獲得し何を喪失してきたか、更には教育論から教育学への体系化が教育心性の何を組織し何をとりこぼしてきたかを明らかにすることによって、学校化社会と言われる教育現実に対する批判の視座を提起することに

V 研究動向

著者の意図があるからだ。この書が教科書風の通史の域を越えているのはまさしくこの点にあり、またそれが17世紀の教授学者とヤンセン派を近代教育史上の転機として重視する、従来の思想史とは異なる枠組を示す結果ともなっている。

ところで、宮澤にしろ中内にしろ、両者に共通しているのは、長期的なスパンにおいて人間形成の全体史を描くことで教育史研究が現在陥っている袋小路を打開していこうとするその方法論と、現代の子どもや教育の問題の解決の糸口をそれらが作られてきた近代にまで遡って求めていくという研究視点である。社会史については学会で異論なくはないが、そこで提起された、知の細分化に対する抗議を含んだ教育史研究の方法論的反省は、すでにある程度研究者間に共有されつつあるのではなかろうか。オーソドックスな立場からではあるけれども、奥平康熙は教育史を現代に連なる教育の問題史として捉えることの大切さを改めて強調し（「現代教育問題と教育思想史」『世界教育史研究会会報』20）、また社会史に直結するわけではないが、近代の教育を新たな角度から捉え直そうとするすぐれた研究成果もすでに現れ始めている。

例えば、学会発表における金子茂「近代学校における「クラス」と授業形態の史的変遷について」と細川たかみ「17世紀末フランスにおける父親の変容」（共に本号掲載）。前者は、アリエスによって注目され、また教育学固有のキー・タームであるクラスの起源や発達を、教師身分の変化、教授課程の変化、教室の分化・独立の観点から説き明かし、クラス論を中心とした一つの理論および政策としてヘルバルト派を再解釈しようとする意欲的なもの。そこに近代学校の段階区分の必要性の提案と、教育の歴史がマンタリテ論だけでは割り切れないとする問題意識があることに注目。後者は、フェヌロンの『テレマックの冒険』に見られる父不在を子から父への意識の変化の相において捉え、17世紀後半フランスの伝統的な「家父」から近代的な「父親」への変容を論じた秀作。16・7世紀イギリス近代公教育の再検討を行った久保田圭司の発表は、最近の社会史の研究成果を取り入れたものであったが、性急な吸収のために枠組にばらつきが見られ、研究意図がいま一つ明らかでなかった。第一次資料に基づく緻密な研究が要求されよう。

(3)

以上見てきたように、新教育も社会史も共に最終的には総合的な通史を志向している。こうした試みは、新たな教育史像の確立のためにも、また視野狭窄に陥らないためにも、今後ますます求められていくであろう。

上記以外の関係では、制度・政策史を中心とした個別研究が依然盛んである。増井三夫、大崎功男、池田稔、坂本弘視、神山栄治、山本久男らの継続研究が所属大学の紀要に発表されており、また遠藤孝夫「L.v.シュタインの教育行政理論の特質とその歴史的

背景」, 大田直子「1862年改正教育令の再検討—市場原理によるイギリス公教育制度の組織化—」など(共に『教育学研究』55巻2号に掲載), 19世紀中葉の改革に焦点を合わせた公教育制度の再検討も始まっている。イギリス近代公教育制度の出発点をロウの改正教育令に求めた大田論文は, 新鮮味はあるが, 市場原理に基づく国家の教育支配だけで事が片付くかどうか議論の別れるところ。公教育の見直しは, 現在フランスで行われている「革命」の見直し論議やサッチャー政権下で実施された1944年法以来の大改革と合わせて, 今後ますます進展していくように思われる。なお近代公教育制度をどう捉えるかについては, 『近代教育の史的展開—松島鉤博士退官記念論文集—』(紫峰図書)に収められたコンドルセの『公教育の必要性』に関する論考(松島), 桑原敏明「公教育制度の歴史的類型論」なども一つの参考になろう。

人物研究としては, 山内芳文「C.F. バールトにおける教育概念の変容について」, 三笠乙彦「ラスキンと民衆教育」(共に同上書), 鈴木剛「ジョン・ロック「知性指導論」と「習慣」成立の視点」(『東京大学紀要』27), 山崎高哉「ケルシェンシュタイナー教育学の基底としての前半生(1)」(『京都大学紀要』34)が目につく。井ノ口淳三, 太田光一がコメニウスに関する論文を各大学の紀要その他に発表しているが, 思想研究の深まりという点では物足りなさを感じた。『世界図絵』の翻訳(井ノ口訳, ミネルヴァ書房)とコメニウス研究誌の資料紹介(太田, 『教育学研究』55巻2号)が行われたこともここに並記しておこう。

訳書では, アリエス図式の再検討を試みたポロク『忘れられた子どもたち』(原著1983年, 勁草書房), ピェール・リシュ『中世における教育・文化』(岩村清太訳, 東洋館), デイルゼー『大学史』全二巻(1933/35年, 池端次郎訳, 東洋館), プラール『大学制度の社会史』(1978年, 法政大学出版局)が見逃せない。後二者のうち, 前者は思想史と法制・制度史の接点で大学の全体史を描いた古典。後者はドイツを中心に社会史的発展との関連で叙述したもので, 大学史研究の発展と動向を知る上でも好著。その他, ギムナジウムの校長や視学官時代の式辞や報告書を集めた『ヘーゲル教育論集』(国文社)がある。なおこれは学術書とは言えないが, 学校の教育よりも世間知や世渡りの術を説いたチェスターフィールド『息子への書簡』(1774)の部分訳が, 歴史を完全に捨象した形で, 竹内均訳『わが息子よ, 君はどう生きるか』(三笠書房)として出た。ベストセラーだと言う。こういう書が好んで読まれている現状を教育史家はいかに判断すべきか。

教科書の類では, 三笠乙彦・森川輝紀編『教育史』(『実践教職課程講座』第18巻, 日本教育図書センター)がある。